平成28年度　第1回生物多様性推進部会　会議録【要旨】

【開催日時】　平成28年7月14日（木）　午前10時～午前11時30分

【開催場所】　西宮市職員会館　大会議室

【出 席 者】　＜事業者＞　西宮商工会議所　常務理事　野島　比佐夫 氏

＜専門家＞　兵庫県立大学　名誉教授　服部　保　氏

関西学院大学　教授　佐山　浩　氏

西宮自然保護協会　理事　大谷　洋子 氏

NPO法人こども環境活動支援協会　理事　小川　雅由　氏

＜事務局＞　環境局長　他13名

【主な内容】

１．報告事項

・「広田山公園コバノミツバツツジ保全・再生管理計画」の進捗状況ついて

・「甲山グリーンエリア地域連携保全活動計画」の進捗状況について　他

・平成28年度自然調査について

・「未来につなぐ 西宮の自然 ホームページ」の進捗状況について

・「御前浜公園予定地の自然環境保全のあり方について意見交換会」の開催について

２．検討事項

・今後の生物多様性の推進について～平成27年度市民意識調査の結果を受けて～

・植物生産研究センターで育成している植物のあり方について

≪質疑応答≫

・今後、アカマツなども枯れてきて、コバノミツバツツジだけが優先するような状況になると思う。照葉樹以外の高木については、あるものはそのまま残していくが、枯れて無くなってしまうものは新たに植えかえる必要はなく、目標とするのは低木林であるということをはっきり位置づけた方が良いと思う。県の里山管理の方法も、以前は高木があって、その下に低木があるという想定をしていたが、防災上、高木は不要で、低木さえあれば良いという考えに変わってきている。ここは傾斜も緩やかだし低木で十分だし、ここの目標は低木林だと打ち出し、低木林の見本として位置づけてしまっても良いのではないか。（委員）

→今のところ、コバノミツバツツジ優先ゾーンと、コバノミツバツツジ＋夏緑樹林ゾーンについては高木を補植する予定はないが、今後も高木は植えないという方針で検討していきたいと思う。（事務局）

・広田山公園周辺で、その他の動植物、特に動物の調査を実施したことはあるのか。（委員）

→鳥類については一部調査しており、一昨年の部会の中でも報告している。昆虫については西宮自然保護協会さんから調査結果のデータをいただいたことはある。（事務局）

→南部でコゲラ等を観察できるのは、この周辺だけだと思うし、今後そのような生きもの調査を活動の中に入れても良いと思う。西宮市の自然調査のホームページではエリアを限定できるのでこのエリアに生息する生きものを継続して調べると面白いと思う。（委員）

・甲山自然環境センター周辺では、すでに相当数フラスが出ている木がある。今までのような大径木だけでなく、１０、２０センチの木でもフラスが出てきている。今後は市民が登山する、施設に出入りする周辺にある木については計画的に管理しないといけない。ナラ枯れが落ち着く頃には次の対策を検討したいと思う。カエンタケについて、昨年はナラ枯れに伴い伐採した木の周辺だったが、今年見つかったのは枯れたコナラ周辺部分に発生しておりチェックする範囲を広げないといけない。また、現在はキャンプ場周辺と登山道の出入り口に注意喚起のポスターを掲示している。（委員）

・甲山の場合はナラ枯れ対策後にどのような木の配置にしていくのかを考えないといけない。植物生産研究センターでも自然林等の利用も生産するかどうかは別として考えておくと良い。また、西宮は都市型里山という名称を使っているが、もっとアピールする定義が必要だと思う。里山という言葉は生産的機能として利用しているというのが絶対条件で、甲山では実際にキャンプ場の薪を生産しているから里山という部分ではぴったりの表現である。一方、都市型というのは、環境学習あるいは文化的活動においてより都市に近い位置で貢献するという意味だと思うが、里山の生産機能を持ちながら、文化的・環境的機能を付加し、西宮に特化したものが都市型里山ということを強烈にアピールすることが必要だと思う。（委員）

・キャンプ場内にナラ枯れ対策で処分した木を置いていると思うが、そこに昆虫は集まってきていないか。（委員）

→タマムシやカミキリムシが発生しており、昆虫好きの市民の方が訪れ昆虫採集をしている。また径の大きなものは薪材として利用しているが、それ以外の剪定枝等はウッドチップに加工して施設の数箇所に横積みしているが、そこはクワガタムシやカブトムシが繁殖できる場所として利用していこうと考えている。（委員）

・調査は植物中心に行うのか。（委員）

→基本的に植生調査であるが、名塩ダム周辺のため池エリアは水生生物の調査も行う。（事務局）

・市役所の防災マップの中に地質、活断層マップがある。地質の部分のチェックも防災の観点として入れ込んでもらえればよいと思う。（委員）

→生物多様性の調査で、なぜ防災の観点が必要なのかと思われるかもしれないが、地層や断層帯は植生に影響してくる等、生物多様性と防災というのは非常に関連しているので、調査の際に防災的な観点は必要である。本来であれば、国交省の管理区域や県の管理区域は除いて西宮市全域での防災の観点を踏まえた調査は必要だと思う。（委員）

・ホームページが開設されたのはいつか。（委員）

→生きもの写真情報館は平成 26 年の 8 月からである。（事務局）

・写真情報館に個人がデータを登録するのは簡単にできるのか。（委員）

→スマートフォンやパソコンが必要になるということから、子供たちにとっては手段が限られていることから難しい部分もあるが、登録方法自体は複雑ではないと考えている。（事務局）

・意見交換会に土地所有者は参加するのか。（委員）

→今回の意見交換会への参加は考えていない。占用は兵庫県が受けており、そのまま兵庫県から西宮市に継承となる。海浜のことについて、防潮堤側の土地所有者からも現状を保存維持していくのならば特に意見なしという状況なので、今回の保全区域の設定と計画については、当然土地所有者に逐次報告し了承を得ながら進めていく。（事務局）

・この意見交換会は御前浜側の隣接の自治会だけで、対岸の西宮浜の自治会は関係ないという扱いになるのか。（委員）

→御前浜の保全管理についての意見交換会であり、別の枠組みで西宮浜総合公園と御前浜公園全体の話をする場があることから、今回は防潮堤に隣接する浜の自治会と活動団体に絞っている。（事務局）

・将来的に管理に参画していただく市民団体はいくつか出てくるのか。（委員）

→西宮浜総合公園と御前浜公園開設後は指定管理による管理となるが、パークマネジメント協議会を設立し、その中で西宮浜は西宮浜、御前浜は御前浜の参画団体を募りながら管理の仕組みをつくっていく予定である。（事務局）

・御前浜で市民団体が何団体か出てきた時にパークマネジメント協議会の中でその複数の団体と協議するということになるのか。（委員）

→パークマネジメント協議会の中で協議して進めるが、その前段階の指針として公園の管理指針をこの意見交換会の中で作成し、維持管理の方針だけを決めていくという位置づけと考えている。（事務局）

→有馬富士公園には色々な活動団体がいて、その活動団体の調整するためとして委員会をつくり活動している。尼崎の中央緑地の場合は一つの団体に統一され管理されているが御前浜公園の場合はどちらになるのか。（委員）

→パークマネジメント協議会の中に各々の活動団体が入り調整していくことになる。（事務局）

→パークマネジメント協議会は御前浜と西宮浜全体の協議会だと思う。現実には御前浜だけの問題もたくさん出てくると思うが、その時に御前浜だけの問題を議論する場はどうなるのか。（委員）

→御前浜だけの仕組みというのはないが、パークマネジメント協議会の西宮浜部会と御前浜部会に分かれ、部会の中で決定していくことになると思う。（事務局）

・生物多様性の認知度について２０代の認知度が高い理由はどこにあると分析しているか。また、エコカード・エコスタンプシステムとあるが、具体的にどのようなものか。（委員）

→エコカード・エコスタンプシステムは小学生を対象にカードを配布しており、地球環境にやさ

しい活動をすると学校の先生や事業者からスタンプを押してもらうことができ、一定数のスタンプが貯まるとアースレンジャーとして認定されるというものである。エコカードは市内小学生全員に配布しているので、その子供たちの親の世代として認知度が高くなっているのではと考えている。（事務局）

・どのような自然を大切にしたいかという設問に対し、河川という回答が多かったが、これはいくつかの選択肢の中から選ばれたものなのか。（委員）

→より単純化しないと傾向がわからないということで、選択肢を用意している。実践している、したい取り組みとして、里山を大切にしたいという答えが多かったのが意外だったが、生物多様性、甲山グリーンエリアとして都市型里山を目指す上で、今後この関心の高い世代を何かのきっかけで取り込んでいくことは可能なのかなと思う。興味深い数字が得られた。（事務局）

→甲山自然環境センターで夏休みイベントの募集をしているが、甲山、社家郷山で行う生き物観察のイベントはいずれも定員に達しており抽選になるほか、甲山自然環境センターに行くと親子が甲山を探しに頻繁にやってきている。そういう意味での里山と昆虫類のいるエリアというのが繋がっているのかなと思う。今まで以上に最近はその傾向が強い気がする。（委員）

・山の近くに住んでいる人は山、海の近くに住んでいる人は海を選ぶといった傾向があるのか、地域別で集計できているのか。（委員）

→地域別での集計はない。今回は市民意識調査であるが、まちづくり評価アンケートを２年頻度でやっている。そちらでは広い意味での環境学習について地域別の統計が出ていたと思うので、機会があれば部会でも報告したいと思う。（事務局）

・公園について、市民が公園に関わる取り組みにはどのようなものがあるか。（委員）

→住民参加制度というもので、公園の清掃に地域の方が関わっているのが２６０公園ぐらいと市内公園の半数近い公園で実施されている。公園の花壇の管理も全公園の半分以上で行ってもらっている。（事務局）

・どのような活動を実践しているかという設問に対し、ガーデニングや家庭菜園の実践という回答が１４．３パーセントと出ているが、先ほど話にあった平成２６年度のまちづくり評価アンケートでは、花や木々を植えるなど緑化活動を行っている市民の割合という項目で６割近い数字が得られている。この差から緑化活動と生物多様性というものが結びついていないからではないかと思うので、啓発していく必要があると考えている。（事務局）

→今までは園芸の世界と生物多様性とは切り離されていて、園芸を生物多様性とは認めないところがあるが、これは一体化すべきものだと思う。（委員）

→生物多様性がガーデニングの実践に繋がらないというところについても所管部署と連携しながら生物多様性の認知を高めるよう進めて生きたいと思う。（事務局）

・何に取り組んでいるかという設問に対し、イベントには参加以外の山・川・海などでの自然との触れあいというのが１０数パーセントあるが、これは西宮の都市的魅力の一つだと思う。一方で

興味はあるが自然に触れる場所までのアクセス手段がないという人もいるのかなと思う。また、例えば川に行っても何かの生き物を観察できたということで完結してしまうが、そこに生物多様性の観点から看板や掲示ボードがあればもっと興味を持つ人が出てくると思う。生物多様性を身近なところから感じてもらえるような情報提供の仕方を考えないといけないと思う。（委員）

・一度失われた植物を自然の状態で回復するのは時間がかかるし困難だから、観察園だけでなく、他の湿原にも植物を植えたほうが良いと個人的には思う。すぐにでも回復させるというのは非常に重要なことだと思う。（委員）

→第４湿原はモウセンゴケ等の種類や数も増えてきて、観察できる箇所も増えてきているので、このままでも見栄えの良い状態になるのではないかと考えている。今の状況でも増えていない種類もあるので、そういうものに力を入れていければと考えている。（事務局）

→どこまで回復させるかという議論で、日常的に湿地の所と草原化している所をどの程度まで手を加えるということを考えないといけない。（委員）

→宝塚の松尾湿原では、徹底的に復元を試みたところハッチョウトンボが発生するまでに状態が回復した。（委員）

→第１湿原の下にキャンプ場の敷地があるので、湿原には水を保証したいが、そうするとキャンプ場に水が流れるということになるので、市の方で棲み分けを考えてもらえれば両方の機能を活かせるのかなと思う。（委員）

→現状では衰退するばかりなので、どこか一部でも回復できるようにすると良いと思う。（委員）

・剣谷湿原にはハッチョウトンボが生息しているが、甲山では絶滅状態である。第４湿原の環境がハッチョウトンボの生息状況と合うかわからないが、剣谷湿原から持ってくることが可能であれば実験してみたいと考えており、繁殖に適するのが第１湿原か第４湿原かを専門的に見てもらい問題なければ、同じエリアなので検討しても良いかなと考えているがいかがか。（委員）

→松尾湿原の場合は周囲に小さい湿原が点々とあり、そこから伝わってやってきたと思う。甲山の周囲にそのような場所がなければ、持ってきても良いと思うが、その前に環境の調査はする必要がある。（委員）

・甲山湿原の問題は検討する事項が多数あるので、すぐに結論は出せないと思うが、植栽についてはどんどん生産して戻していけば良いと思う。（委員）

（次回開催予定）

次回の会議は１０月または１１月ごろを予定。（事務局）